別紙２

自ら学び続ける教職員研修支援事業　活動報告書

グループ名　チーム美女と輪中

テーマ　ふるさと大垣を愛し、災害から自らの命を守ることのできる生徒を育てるために

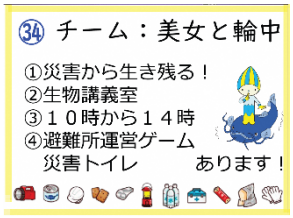
取組のポイント・成果

取組の内容とポイント

・チーム構成員の専門教科（家庭科、保健体育、理科、数学、国語、情報）の知識・技能を「防災」というキーワードによって集結させた。
・専門教科の外に持ち備えている資格（応急手当普及員、ライフセーバー）及びそれに基づいた能力を存分に発揮し、校内での防災力を高めた。

(1)救急救命講習会への準備と振り返り（令和 6 年 6 月）
・応急手当普及員（チーム構成員）がテキストを作成。AED の場所の明示、校歌による胸骨圧迫の速度の提示など、本校用にカスタマイズした。手のひらサイズで携帯可能。

(2)講演：東日本大震災を乗り越えて～職務として生徒の命を守る～（令和 6 年 9 月）
・やまもと語りべの会の井上剛（たけし）氏を講師に迎え、想定外の災害が発生した際にも組織で連携して対応することで生徒の命を守るための覚悟や心構えを学んだ。



(3)避難所運営訓練 HUG 体験（令和 6 年 9 月）
・文化祭の有志企画のために HUG を体験した。本校では、近隣住民の避難場所は体育館と同窓会館のみとなっており、要支援者にはどのような配慮が必要かを具体的に考えることができた。

(4)講演：南海トラフ地震発生時に本校が避難所になったら（令和 6 年 11 月）
・常葉大学社会環境学部准教授の小村隆史氏を講師に迎え、20 万分の 1 の地勢図を用いながら、地震の規模による想定被害の違いについて議論した。災害を図上でイメージすることで、この地域の危険性を実感することができた。

(5)交流：浅中南地区自治会長による水害の歴史講話（令和 6 年 11 月）
・本校の位置する地区の自治会長に、この地域の昔と今の航空写真を用いながら、発災時に起こりうる混乱を説明していただいた。南海トラフ地震により液状化した際に、本校が避難所として機能するかどうか、物資が届くかどうかが論点となった。

(6)防災トランプと HUG を教具として活用するための検討（令和 7 年 1 月）
・家庭科で既に取り入れられている防災トランプの活用法を他教科でも導入できないか検討した。

今後の課題

【研修 の 課題】今年度、校内での防災力を高めることには貢献できたが、チーム構成員が転勤したとしても、その力が学校に根付くように長期的な活動を行いたい。
【今後の方向性】他校（例えば、近隣の特別支援学校や被災地の高等学校）との交流を行い、校内のみならず、外部とも情報共有をしたい。
【還元 の 方法】本活動を通じて得た人的ネットワークを生かして、総合的な探究の時間（ふるさと教育）や特別活動において、生徒がより深く防災を学習できるように指導する。